

『法華経』における授記の意義

崔 箕 杓

一 問題の所在

一般的に授記 (vyākaraṇa) と言えば、未来のことを預言 (prophecy) するものと理解される場合が多い。しかし、天眼通を得ている者も先のことを見通すことができるし、未来学の学者たちも未来のことを予測しうるができる。しかしながら『法華経』における授記の事例を検討してみれば、それが教学的にも、また修行論的にもより深き意味を含蓄していることが分かる。本稿では『法華経』における授記の意義を考察し、その現代的な解釈を試みることしたい。

二 『法華経』における授記の諸相

(一) 声聞弟子に対する授記

釈迦牟尼仏が靈山会上において、声聞の弟子たちに対して行った具体的な授記は、「譬喩品」第三、「授記品」第六、「五百弟子受記品」第八、「授学無学人記品」第九、「提婆達多品」第十二、「勸持品」第十三において都合八千五百十二人を対象に六回に亘って行われる。このなかで名前が明かされた人物は、舍利弗など二十三人である。

彼らに授記が与えられる内容をみると、受記者が成仏する時の①仏の名号 (仏名)、②時代の名 (劫名)、③国の名称 (国名)、④国土の美しさ (国土莊嚴)、⑤弟子たちの数と種類 (成就衆生)、⑥如来の寿命、⑦法の存続する期間 (正法と像法) などの記述である。このうち一つや二つが省略される場合もあるが、概ね類似の形式を

整えていることが確認できる。そして三百万億仏（摩訶迦葉）、三百万億那由他仏（須菩提）、八千億仏と三万億仏（大迦旃延）、八千仏と二百万億仏（大目犍連）など、すべてが天文学的数字ではあるが、一定の数の仏に見え、法を聞き、供養した後には成仏することができる¹と明かしている。

（二）授記の条件としての歡喜心

法会の参列者のなかで、具体的な内容を以て授記される者は、すべてが比丘や比丘尼など出家の大衆に限られる。果たして彼らはいかにして優先的に選ばれたのであろうか。最初に授記を受けた舍利弗の事例を見てみると、次のような描写が注目される。

その時、舍利弗はおどりあがって喜んで、すぐさま起ちあがって合掌し、…（中略）…今、仏よりこれまで聞いたことのない未曾有の法を聞き、すべての疑心や後悔を断ち、身もこころも泰然として、快く安穩なることを得ました²。

ここで舍利弗は、自身も仏の無量の智慧と能力とを成就することができるという説法を聞き、大きな喜びを得て、すべての疑心と後悔とが消え去ったと告白している。以後にも授記を受けた者のほとんどが未曾有の法を得て、大きな喜びを表している。

・摩訶迦葉ら四人〔信解品〕第四

發希有心。歡喜踊躍（大正藏九・一六中）

・富樓那ほか五百阿羅漢〔五百弟子受記品〕第八

得未曾有。心淨踊躍…（中略）…我等歡喜。得未曾有

（大正藏九・二七中）

・阿難、羅睺羅、二千人の弟子〔授學無學人記品〕第九

設得受記。不亦快乎（大正藏九・二九中）

彼らはみな自分たちの成仏の可能性を悟り、大きな喜びを表した後、仏が自分たちのためにも授記されることを強く希望していることが分かる。比丘たちの疑いなき喜びに比して、比丘尼たちは少し変わった様子を見せている。すなわち、摩訶波闍波提と六千人の比丘尼、そして耶輸陀羅が授記を受ける前のこころの状態については、次のように描写されている。

座より起って一心に合掌して、世尊の顔をじっと仰ぎ見て、しばしの間もその目をそらすことはなかった。その時に、世尊は憍曇弥に告げられた。「どうして憂いにみちた顔でじっと如来を視ているのか」³。

すべての衆生が成仏することができるといふ説法を聞き、喜びのところが生じたが、一方では心配をしていることが分かる。このよ
うな憂いは、女性の身分でも果たして成仏することができるであ
うかという心配からくるものであろう。しかし、自分たちも授記を
受けたという一心で座より起って、世尊に合掌して目をそらさな
いでいる。そこで世尊は彼女たちにも授記を与えている。授記を受
けた後は、「みな大いに歓喜」したことは言うまでもなく、授記を
受けたことで、女性も成仏することができるであろうと確信が持
たようである。女性の場合、わずかながら時間の差はあったもの、
比丘と比丘尼とが成仏に対する確信を得て、大きな喜びを表して
いる状況の描写は同様である。

（三）提婆達多に対する授記

特異な様子を見せている事例は、提婆達多に対して授記が与えら
れる場面である。世尊は自身が提婆達多より『法華経』を聞いた過
去の因縁を話した後に、提婆達多が天王仏として成仏するであら
うとし、まさにこの品を聞いて疑心を起こさぬ者は、大きな功德を
うるのであらうと説示される。しかしながら提婆達多に授記が与えら
れる場面では、当の提婆達多が授記を受ける前と受けた後の反応に
ついては、歓喜はおろかなんの描写もされないのである。

周知の如く、提婆達多は別の僧団を設けようとしては失敗し、つ

いには仏を殺害しようとした悪人であった。数回に及んだ殺害の企
図が無為に終わるや、最終的には爪に浸けた毒薬を以て如来を殺害
しようとするが、如来の居所の前に到っては地獄に墮ちてしま
う。その瞬間、提婆達多は改心して「南無仏」となえようとするが、
すべてを口にするこなく、「南無」とだけを言い残し、地獄に墮
ちることになる。このことにころを痛めた阿難が提婆達多の未
來のことを仏に尋ねると、地獄で一劫を過ごした後、天上界に生まれ
て、さらに六十劫が過ぎた後に「南無仏」という名号の辟支仏にな
ると記別された。¹⁾

ここで注目すべきことは、提婆達多が「悦びのころ（和悦心）」
で「南無」ととなえたという内容である。仏は彼が死を前にして、
ころを込めた「悦びのころ」で仏に帰依した因縁によって、辟
支仏までは達することができると授記されたのである。たとえ大罪
を犯したとしても、仏に対してころを込めた悦びのころで帰依
をすれば、その因縁はなくなることはなく、六十劫を経た後にその
果報は必ず結ばれると示現されたのである。しかし、提婆達多が仏
に対してころを込めて帰依し、歓喜心を発したとしても、その果
報が辟支仏までとしか達せられなかったのは、彼が見えた仏が藏教
の仏、すなわち寿命や智慧が有限である仏にして、ただ自身よりは
はるかに偉大な方ではあっても、それ以上の方とは思っていなかつ
たためであらう。

これに対して円教説法である『法華経』においては、因縁を作る時期を提婆達多が釈迦牟尼仏の前身に対して『法華経』を説く「過去無量劫」に遡らせ、果報を結ぶ時期も「過去無量劫」と拡張させて、時期に幅を持たせている。要するに、無量の智慧と寿命とを成就された円教の仏が説かれた円教説法を受持した因縁によって、確かに過去において悪業を作ってはいるが、最終的には天王仏として成仏することができる授記されたのである。そして、『法華経』において提婆達多に授記が与えられる時の彼の反応について、なにも言及されないことについては、彼がすでに生涯を終えた後に『法華経』が説かれ、『阿含経』において彼に辟支仏になるとの授記が与えられる場合と同じように、彼がその場に居なかつたからであるとみれば、十分に納得しうるものであると考えられる。

三 『法華経』の授記に対しての諸々の解釈

(一) 受記人に関連する解釈

世親は『法華論』において、決定声聞・増上慢声聞・退菩提心声聞・応化声聞の四種声聞のうち、退菩提心声聞と応化声聞には、仏が授記を与え、決定声聞と増上慢声聞には授記を与えないとしているが、『法華経』において授記が与えられた者は、果たしてどの部類に属すると見るべきであろうか。

世尊は舍利弗に授記を与えながら、「本願によって修行してきた道を思い出させようとするために、この大乘経を説くのである」という前提を設けている。本願とは、阿耨多羅三藐三菩提を得ようとする誓願を指しているため、舍利弗は大乘より退歩した声聞であることが明確である。また、阿難についても、過去に空王仏のところにおいて阿耨多羅三藐三菩提を發しており、「その本願はこのようなものであり、そのゆえにこの授記を獲たのである。」と説示されているため、阿難もなお退菩提心声聞の一部類として授記を受けたものと考えられる。さらに、遠い過去の大通智勝仏の時代に、その仏の出家する前の息子であった十六人の菩薩沙弥のなかで、釈迦牟尼仏の前身である第十六番目の沙弥が「阿耨多羅三藐三菩提の法を以て衆生たちを教化」し、その時に教化された多くの声聞たちが現在声聞地にとどまっている会中の大衆であるという趣旨の言及を想起すれば、彼らも退菩提心声聞である可能性がある。

智顛はこの経文を注釈して、現在声聞地にとどまっている者は、「(三菩提心より)退転して、今、声聞(地)に住する者」と論じているが、このような解釈に基づけば、靈山会上において釈迦牟尼仏より成仏の授記を受けた声聞たちは、すべて退菩提心声聞にして、自分たちの遠い昔に立てた本願を思い起こして、再び歓喜し、新たに菩提心を發し直した場合にあたりと見るべきであろう。ただ一人、歓喜心を發す状況についてまったく明かされていない

提婆達多に対する端緒としては、次のような経文が注目される。すなわち、迦葉菩薩が釈迦牟尼仏に提婆達多のことについて尋ねると、釈迦牟尼仏は次のように答えている。

提婆達多は…(中略)…僧伽を破壊することも、仏身より血を出だすこともしていない…(中略)…一闍提でもなく、また声聞や辟支仏でもない。善男子よ、提婆達多は、実に声聞や縁覺の境界ではなく、ただ諸仏のみ知見する境界にある。

引用文の趣旨は、提婆達多が行った悪行は方便であって、真に悪いところで行ったものではなかったと理解することができる。それから、声聞や辟支仏ではないというものも、提婆達多は実は菩薩であるが、方便として声聞比丘の姿を現じたことを意味するものと解釈される。すなわち、提婆達多菩薩は方便として示現した応化声聞にして、遠い過去に『法華経』を受持した功德がいかに大きいものかを表さんがために、授記が与えられたものとみることができるのである。

(二) 修行の段階に関する解釈

提婆達多を除き、授記を受けたすべての者は、一樣に仏の説法を聞いておどりがあって喜ぶほど、大きな歓喜心(歓喜踊躍)を発し

ている。歓喜心とは、「わたくしのところは大きく歓喜し、疑心と後悔は永く尽きました」という舍利弗の告白のように、疑心と後悔とが完全に断ち切られた時に生じる喜びである。この時の疑心と後悔とは、果たしてなにに対する疑心と後悔とであろうか。

「方便品」において説かれた内容を通じて、弟子たちは無問自説で行われた仏智慧を聞いて、仏の成就された能力と智慧に対する疑心を、そして一大事因縁と会三帰一の説法を聞いて、自分たちが果たして仏のように成就することができようかという一抹の疑心さえも、完全に断ち切ることができたのである。すなわち、法に對する理解(解)と、仏と自分たちの成仏に對する信賴(信)とが生じたことを「疑心が尽きた」と表現したのであると解される。後悔とは、自分たちはかつて菩薩道についての説法を聞いていたが、それは自分たちの本分ではないと思ひ込んで、そのように実践してこなかったことに對する後悔である。

このように深き理解と信心に基づいている歓喜は、まさしく阿耨多羅三藐三菩提を得んがための發菩提心につながっている。『大乘起信論』によると、「信成就發心、解行發心、証發心」と三種類の發心があるとされている。これに関連して元曉は、信成就發心とは、十信を満たして初住位に入る時のことをいい、舍利弗などがこれに該当すると注釈している。とくに舍利弗は、不退地である第七住まではないまだ達し得ていなかったために、その間に退菩提心を發し

てしまったと論じており、これは先ほどの、舍利弗が退菩提心声聞であったために授記を受けたという事例とも符合している。

発菩提心を発したということは、すなわち、菩薩になったということの意味する。五十二位の菩薩階位によると、初信より第十信までは仮名菩薩といい、菩提心を発して初発心住に達した菩薩であればこそ真の菩薩（実義菩薩）であるという。¹²したがって、舍利弗と須菩提などの声聞たちは、説法を聞いて大きな歡喜心を発して初住位に達しているため、真の菩薩になったとみることができるのである。初住位を別に歡喜住ともいうのは、この歡喜心と関連している。智顛も彼らが「初住の無生得記の位に入ることを知る」と論じている。迦葉三兄弟をはじめ、五百人の阿羅漢は、「わたくしたちは、今、実に「菩薩」であり、阿耨多羅三藐三菩提の授記を得ることができると知りました。このような因縁によって、甚だ歡喜して、未曾有を得ました」と仏に告げている。これは自分たちが菩薩になったことで、授記を受けることができ、そのために大いに歡喜していることを直接的に表現している事例である。

(三) 授記の言語的解釈

授記の梵語は語源的に vy-ā-√kri と分析される vyākaraṇa である。これは「分離 (separation)」、「區別 (distinction)」、「判別 (discrimination)」、「説明 (explanation)」など翻譯され、『法

華經』において用いられる場合は、「預言 (prediction, prophecy)」と解釈されるのが一般的である。ビヤーカラナを漢訳するに際して用いられた用語としては、「記」、「決」、「別(別)」などがある。初期の訳経家として、于闐出身である無羅叉は、「別」と「記」の両方を用いたし、北印度出身の僧伽提婆 (Saṅghadeva) と、月支が故郷である竺法護 (Dharmarakṣa) は、主に「決」を用いながら、時に「別」をも訳語として用いていた。「別」と表記される用例も多数見られるが、これは「別」と混用したものと考えられる。慧琳は「別」のほうが正しく、「別」を用いるのは誤りであると指摘している。¹³

「決」には、「堤防が」決壊する、「決断する」、「確定する」などの意味があり、「記」には、「記録する」、「記憶する」、「印章」などの意味がある。印章とは、ある物の所有主を表示するなり、文書の権威を確定するに際して主に用いられる。「確定する」というのは決の意味に類似しており、「區別」、「判別」というビヤーカラナの意味ともつながっている。「無記は善性とも悪性とも「確定」できない」という場合の「確定」とまさしく同じような脈絡である。

次に注目すべきは「別」である。儒家ではほとんど用いられないこの文字は、「苗木を移植する」、「符節」などの意味がある。苗木を移植するということは、種から芽が萌え出た幼い植物を畑に植えることである。種の状態では芽生えるかどうか、いつ芽生えてく

るかも知れないが、すでに芽生えて畑に植えつけば、特別な異変がない限りどのように成長するかは、ほぼ確定的に予測することができる。「符節」は身分の証票として使うものであるから、印章と類似した用途で使われ、それが有する意味もなお「確定」と脈絡が通じている。よく種子に譬えられる仏性は、種子の状態のままでは、いつ芽生えて花を咲かせるかが分からないが、芽生えたものは畑に植えつけさえすれば、今後実ってくるのが予測できるように、菩提心を発せば、成仏の時期や様子を「確定的に分別する」言葉を以て、授記という形で与えられるのである。また符節という言葉の意味を取れば、授記とは、「(成仏を) 証明する信標」を与えることと解することもできるであろう。

四 結論 — 授記の意義 —

『法華経』には成仏授記の事例が具体的にかつ多様に表れている。これらの授記は大きく二つに分けられる。一つ目は、『法華経』を聴聞したすべての者が成仏することができるという一般的な授記であり、二つ目は、時期や名号などが具体的に説示される個別的な授記であって、智顛の表現によれば、通途記と別与記がこれである。

『法華経』の前半部、すなわち迹門で説かれる核心は、三諦円融せる諸法実相を普く知見する仏の智慧と、一切の衆生をこの智慧へ

と導こうとする仏の一大事因縁、そしてこれまでの説法のすべてが成仏へと引導せんとする内容であることを明らかにすることであった。すなわち、声聞乗や縁覚乗などの教えは方便に過ぎず、一切は仏乗へと導かれるという会三歸一を通じて、実質的には小乗など存在しないという意味を内包している。このような説法が理解できれば、すべての修行者は大乘の教えを實踐する菩薩となる。彼らに対して仏は成仏の授記を授けるのである。しかし、この授記というのは、その対象も明確にされず、時期や名号なども明かされない一般的な授記なのである。授記を受けた菩薩もなお仮名菩薩に過ぎず、真に利他行を以て菩薩道を遂行する者ではない。

これに対して舍利弗などその名が明かされた二十三人をはじめ、都合六回に亘って八千五百十二人に対して与えられた授記は、成仏の時期や名号などが具体的に説示された授記である。彼らの共通点は、説法を聴いた後、大いなる信心と理解に基づいた歡喜心が生じたことである。これを言い換えれば、阿耨多羅三藐三菩提を成ぜんとする菩提心を発したというふうに理解することができるのである。菩提心を発したということ具体的な言うなれば、「一切衆生を濟度せんとすること」と「すべての煩惱を断じ尽さんとすること」、そして「諸々の法門を知り尽さんとすること」と「無上の仏道を行じ成就せんとすること」という四弘誓願である。¹⁶⁾ 智顛は菩薩の誓願をこの四つの項目にまとめあげ、前の二つを大悲の誓願とし、後の

二つを大慈の誓願とした。これは修行の段階からみれば、少なくとも初住位、すなわち発心住に達した菩薩のことになる。

このような菩薩に対して、仏は成仏の授記を与えた。これはあたかも種子の状態であった仏性が芽生えて良く育つようになった時に、その未来を確定的に明らかにすることができるように、「成仏することを確定的に分別」することのようである。したがって授記とは、仮名菩薩ではなく、真の菩薩地に達した時にその「信標」として与えるものと解することができる。

智顛によれば、菩薩に授記を与えるもう一つの理由がある。それは、大菩薩より退転して小菩薩に入らんとする欲求を破さんためである。『大智度論』では、小菩薩とは柔順忍を学ぶ者とするが、柔順忍とは性地、すなわち十信位を指すものであり、いまだ菩提心を発していない仮名菩薩のことである。一般的にこの段階での退墮とは、大乘菩薩より退転して小乘声聞地に退くことをいうが、開三頭一の説法を通じて、すでに小乘という者はなくなったために、智顛は小菩薩という表現を用いているのである。¹⁶⁾ このようにみれば、『法華経』において、法会に参列した菩薩に対して、授記が与えられなかった理由が説明できよう。

『法華経』において個別的に授記が与えられた者は、世親の四衆声聞の分類からすれば、退菩提心声聞、すなわち菩提心を発したが退転してしまった声聞であって、歓喜心を発するなどの様子が見受

けられない提婆達多の場合は応化声聞にして、すでに生を終えていたため、靈山会上に参列できなかったものと推定される。小乘より大乘へと、声聞より菩薩へと転換した修行者たち、すなわち修行の目標を、もはや輪廻をしないという消極的な涅槃である灰身滅智より、究竟の仏智である阿耨多羅三藐三菩提を求めるところに拡張した者たちに対して与えられるのが成仏の授記なのである。この過程において衆生を済度せんとする菩薩行が必須であることは言うまでもない。

実に『法華経』の説法を聞いて大いなる信心を起すことは非常に難しいものである。十信の段階でみるように、願を立てて固く戒を守る、修行の実践が伴ってこそ成し遂げられるものである。このようにして確たる菩提心を発した時に、仏より成仏の授記が与えられるのである。それには真の菩薩になったことに対する確定的な証明と、再び菩提心より退転してはならないという激励の意味が含まれている。

注

(1) 『妙法蓮華経』「譬喩品」第三に「爾時舍利弗。踊躍歡喜。即起合掌……(中略)……今從仏聞。所未聞未曾有法。斷諸疑悔。身意泰然。快得安穩」(大正藏九・一〇下)とある。

(2) 『妙法蓮華経』「勸持品」第十三に「從座而起。一心合掌。瞻

仰尊顏。目不暫捨。於時世尊。告憍曇弥。何故憂色。而視如來」
(大正藏九・三六上) とある。

(3) 『增一阿含經』卷第四十七「放牛品」(九)(大正藏二・八〇二中—八〇四下) 参照。

(4) 世親『妙法蓮華經憂波提舍』卷下(大正藏二六・九上) 参照。

(5) 『妙法蓮華經』「譬喻品」第三に「我今還欲令汝憶念本願所行道故。為諸声聞說是大乘經」(大正藏九・十一中) とある。

(6) 『妙法蓮華經』「授学無学人記品」第九に「其本願如是。故獲斯記」(大正藏九・三〇上) とある。

(7) 『妙法蓮華經』「化城喻品」第七に「諸比丘。我等為沙弥時。各各教化無量百千万億恒河沙等衆生。從我聞法。為阿耨多羅三藐三菩提。此諸衆生。于今有住声聞地者。我常教化阿耨多羅三藐三菩提。是諸人等。應以是法。漸入仏道。所以者何。如來智慧。難信難解。爾時所化無量恒河沙等衆生者。汝等諸比丘」
(大正藏九・二五下) とある。

(8) 智顛『法華文句』卷第七下に「此諸衆生。退転者。今住声聞三所以者何下。釈退住意」(大正藏三四・一〇〇上) とある。

(9) 『大般涅槃經』卷第十五「梵行品」第二十之二に「提婆達多…(中略)…亦不壞僧。出仏身血…(中略)…非一闍提。亦非声聞辟支仏也。善男子。提婆達多者。実非声聞縁覺境界。唯是諸仏之所知見」(大正藏十二・七〇三中) とある。

(10) 『妙法蓮華經』「譬喻品」第三に「我心大歡喜 疑悔永已尽」
(大正藏九・十一中) とある。

(11) 元曉『起信論疏』卷下(大正藏四四・二二〇中) 参照。

(12) 『大般涅槃經』卷第三十一「迦葉菩薩品」第二十四之一(大正藏十二・八一二中) には、菩薩に実義菩薩と仮名菩薩の二種類があるとしており、『華嚴經』卷第三十六「宝王如来性起品」第三十二之四(大正藏九・六三〇上) には、『華嚴經』を聞けなかつたか、聞いていても信じなければ、依然として仮名菩薩であると説いている。

(13) 智顛『法華文句』卷第九上に「当知得入初住無生得記之位也」
(大正藏三四・一二四中) とある。

(14) 『妙法蓮華經』「五百弟子受記品」第八に「我今乃知。実是菩薩。得受阿耨多羅三藐三菩提記。以是因縁。甚大歡喜。得未曾有」(大正藏九・二九上) とある。

(15) 慧琳『一切経音義』卷第二十六に「記別…(中略)…分簡也。経文作別。非也」(大正藏五四・四七九中) とある。

(16) 智顛『摩訶止観』卷第五上に「衆生無辺誓願度。煩惱無數誓願断…(中略)…法門無量誓願知。無上仏道誓願成」(大正藏四六・五六上) とある。これは十乘観法のなかの発真正菩提の内容である。

(17) 龍樹『大智度論』卷七十一に「小菩薩所学柔順忍」(大正藏

二五・五五七下）とある。

〔18〕智顛『法華文句』卷第七上に「破欲退大入小菩薩。何者。若定有二乘。可退為小。今無二乘。何所可退」（大正藏三四・九七中）とある。

〔翻訳〕角 田 玲 子（釜山科学技術大学校教授）

金 炳 坤（法華經文化研究所研究員）

本稿は二〇一〇年金剛大学校校費研究費による研究成果である。